

『表紙解説』

山部のキリシタン塔

本匠村大字山部字松葉の松葉、登尾線の道路脇に住む甲斐時夫氏宅の屋敷外れに小さな谷があり、そこを少し登った共有林の岩場に庚申塔や墓石を集めた古塔群がある。

その中に、壊れがひどいキリシタン塔と思われる石塔が転がっている。昔からここにあったものか、他所から運び込まれたものかは分からないが、今ある位置より少し上の台石の上に置いていたと、近くの人が話してくれた。

石質は凝灰岩で、縦巾が四十八葺、横巾が六十五葺で、中央にラテン十字が浮彫りされている。十字の縦の上部が少し欠けているが、長さが三十三葺、横は十九葺、巾が四葺である。

この塔が建っていたのか、伏せてあったのか、また、信仰礼拝の対象物としての石塔であったのか、それとも個人の伏せ墓であったのか分かっていない。

塔の表面が丸みを帯びているので、おそらく蒲鉾形の伏せ墓ではなかるうかと想像される。これだけ大きな十字であるので、隠れキリシタンのものでなく、布教時代に造立したものだと思われる。

近くの墓石の中には寛文年間（一六六一〜一六七二）の年号を刻んだ塔などもある。

解説 五十川千代見

原稿募集

佐伯史談第一号発行から三十年余り経って、初めて競争に関する原稿を募集しました。

結果はそれ程多く寄せられませんが、内容の生しさと戦争が残した爪痕の深さを思い、終生忘れることのない出来事として、脳裏に蘇ってきます。

次号も引き続き戦争体験記を募集します。
原稿をお寄せ下さい。

メ切り 四月末日

送り先

